鯉喰神社墳丘墓特殊器台

宇垣匡雅

はじめに

鯉喰神社墳丘墓は倉敷市矢部に所在する弥生時代後期末葉の大形墳丘墓である。墳形は長方形で全長四〇ｍを測る。特殊器台のほか特殊壺、高杯、脚付直口壺等が伴うことが明らかになっており、特筆される資料として弧帯文石（平野・岸本二〇〇〇）がある。通常、弧帯文は木製品や土器に刻まれるが、それを刻んだ石製品は吉備では楯築墳丘墓で知られる他はこの遺跡のみである。

ここで紹介する資料は近年博物館に寄贈いただいたもので、遺跡見学の際、洗い出されて散乱した状態であったためやむをえず採集したとのことである。

一　資料

資料は特殊器台破片が中心で、特殊壺ほかの破片を含む。1は特殊壺等の受け部である。器壁は薄く大きな器種ではないと思われる。口縁拡張部の基部には斜線が連続しており鋸歯文が配されたとみられる。受け部内面はナデ、外面には凹凸の幅がごく広いヨコハケが見られる。2は小形特殊器台の受け部から頸部にかけての部分である。外面下部には沈線をめぐらせており、この箇所には下からの切り込みがわずかに残る。巴形透かし孔の尾部と思われる。小片3は2に類する破片である。

4は特殊壺胴部片であるが、復元径は三〇・四㎝でこの時期の特殊壺としては小さく、小形特殊器台とセットになるものであろう。肩部の突帯は細く断面M字形である。それの下側は残存範囲が狭いが、斜線文を充填する間に鋸歯文を配するようである。5も特殊壺で、下側の突帯から胴部下半にかけての破片である。突帯は細く低い。外面下半にはタテハケが見られる。

6～16は特殊器台筒部破片である。6は頸部から最上段の文様帯にかけての破片で、頸部には巴形の透かし孔を配する。文様帯には平行沈線で形成される帯が組み合う連続渦文が刻まれる。わらび手形の帯が横に連続しそれに平行・直交する帯が交差しており、渦状部には巴形、上下両端には三角形の透かし孔を配する。渦状部の横に配される長方形状の透かし孔は渦状の帯に接する側の上隅に小さく切り込みを加える。これの反対側の短辺はほぼ直角になるが、破片右端に部分的に残る透かし孔の短辺は長辺に対して斜めになる。貼り付けで形成される突帯は上面が広く、浅い二条の凹線を配する。内面はヘラケズリである。文様帯幅は七・四㎝に復元できる。7も6と同様で幅八・四㎝の間帯の上下に文様帯の一部が残る。間帯は横方向のハケメ施文である。上側の文様帯では渦状部左側の透かし

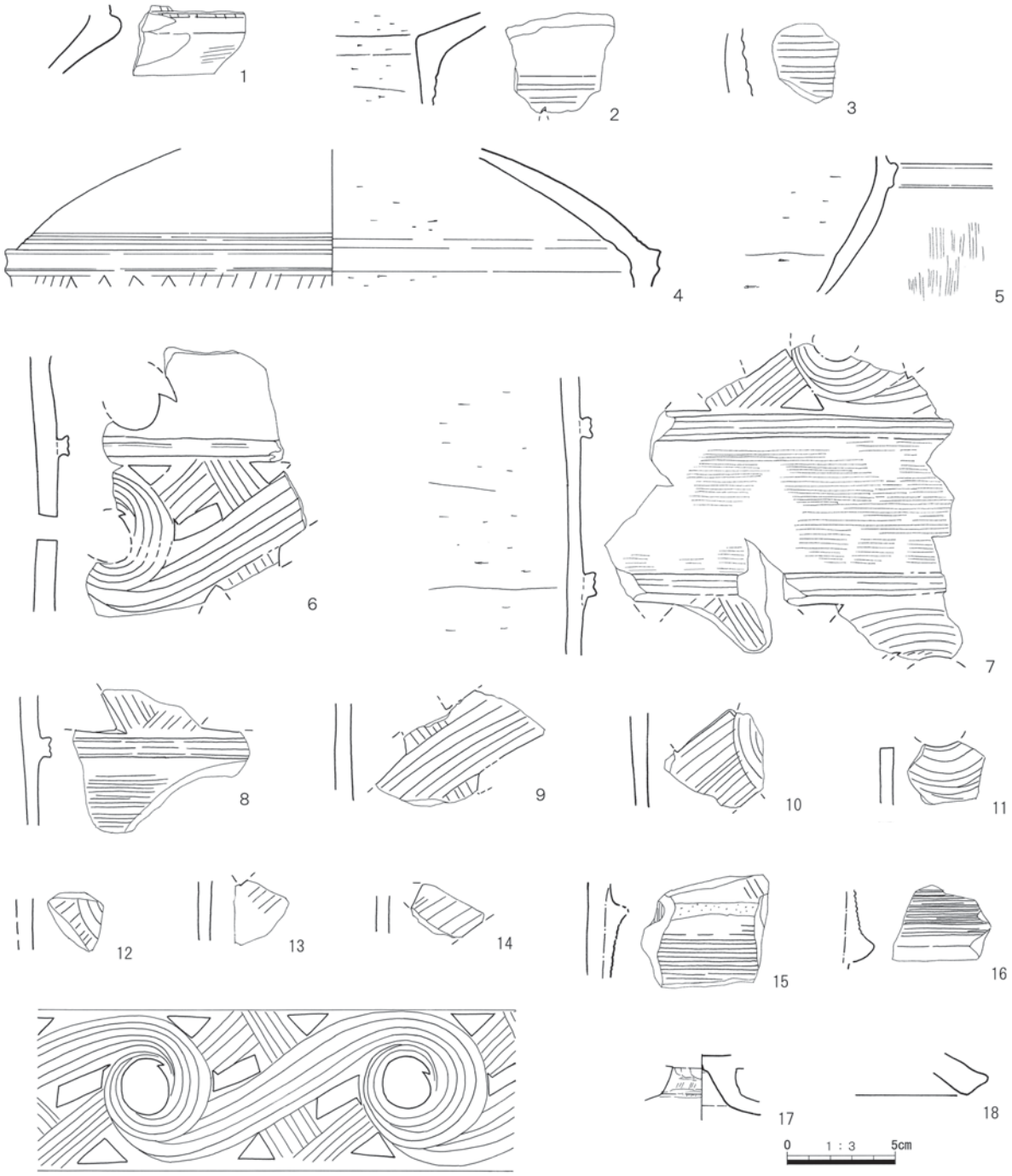


図１　鯉喰神社墳丘墓出土資料　1：3

孔の端は下に切り込むのに対し、下側の文様帯では帯の巻き込みに沿って上隅で横に入れており、切り込みの入れ方は一定ではない。破片のほぼ全体に黒斑が広がる。8は6・7によく似た色調の破片である。内面は同じくヘラケズリであるが窪んだ箇所に丹が付着しており、塗布の際に内面にかかった丹が残存したとみられる。9～14は文様帯の破片である。10の斜めの帯は他よりもかなり幅が広いなどの相違はあるが、6・7と同じ文様を構成する。10では透かし孔の切り込みが下に向く。また、9は透かし孔の短辺が斜めになる。

15・16は類似した色調

の破片である。15は粘土の貼り付けによって間帯を形成しており、その上端を高くして突帯とする。文様帯は部分的にしか残らず、斜めに平行沈線を入れるまでしかわからない。6～14と同じ文様とすれば破片左側に三角形透かし孔の底辺があってもよいがそれは認められず、別種の文様になるようである。間帯には櫛状に近いハケメを横に入れる。貼り付けた粘土が部分的に剥離した箇所では筒部調整のタテハケが見られる。内面調整はヘラケズリである。16は貼り付けで形成された間帯が筒部から剥離したものと判断できる。間帯の施文は櫛状工具による細かい平行沈線である。

1では内外面、他では外面に丹塗りが見られる。1～16の色調は薄い褐色から黄褐色までとやや幅があるが、焼成の差であろう。なお、6～9は同一個体の近接した部位と思われる。いずれも角閃石の小粒を多く含む。

17は高杯あるいは脚付直口壺の脚で脚柱部の調整はタテハケののち横のヘラミガキである。赤褐色で、微砂を少量含む細かい胎土である。

18は器台の脚端かと思われる。赤褐色で粗砂粒を含んでおり、古い時期の遺物の混入の可能性がある。

二　資料の特徴と評価

以前、筆者は、それまでの文様の変化を主要な要素とする特殊器台の編年に、間帯の形成手法とその部分の施文の変化などを加えた編年案を示した（宇垣一九八一）。第二型式中山型では間帯は薄く粘土を貼り付けて肥厚させ、それの上下に突帯を配置する。間帯の施文は櫛状工具による細い平行沈線である。第三型式向木見型では間帯は突帯のみの貼り付けで形成され、その間はヨコハケを施文として用いる。文様も第二型式中山型と第三型式向木見型で異なり、後者ではいわゆる向木見型の渦状文が刻まれる。以上のように整理した。

ここで示した資料を間帯の形成手法で見ると16は第二型式中山型の、6・7は第三型式向木見型の特徴を示し、15は両者の折衷と言える。資料は新古それぞれの様相をもつ個体が共存していると判断できる。新しい要素の出現をもって画期とすれば編年に変動はないが、向木見型特殊器台の資料でこうした古い要素を含むものは知られていない。示した資料は向木見型の最も古い段階に位置づけることができる。このことは、6・7の装飾性が強い突帯や、突帯が細く肩の丸みが強い特殊壺4の形状とも整合する。

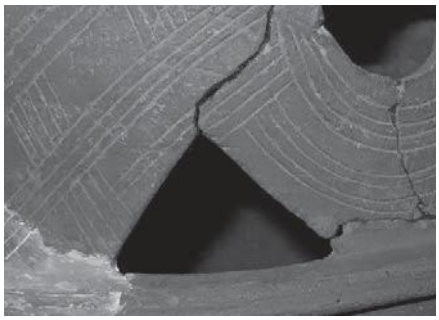
文様の特徴　6・7は文様の残存範囲が広く、文様の構成を知ることができる。巴形透かし孔をつなぐわらび手形の帯、それに直交する帯と渦状部分（巴形透かし孔外周）を斜めに突き抜けるように配される帯で構成される文様であり、筆者が以前示した分類ではあたご山型文様（宇垣一九九二）に属し、このことは以前採集された資料の観察から岸本道昭氏が指摘している（平野・岸本二〇〇〇）。なお、春成秀爾氏はこの文様を西山系特殊器台のうちの西山式（春成二〇一七）とする。

鯉喰神社墳丘墓資料の特徴となるのは、渦状部分の両外側に配置

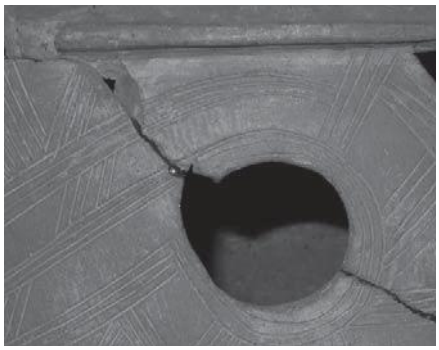
される透かし孔の形状である。渦状部分に接する側は帯の曲線に沿うように小さく切り込みを入れる。透かし孔は矢印の形になり、帯を巻き込む渦状部分を強調する意匠である。渦状部分では左側の帯の先が巴形透かし孔を全周し、右の帯はそれの下側に潜り込む。

透かし孔と文様沈線　この文様の評価に先立って、特殊器台の文様を構成する沈線と透かし孔の関係について改めて述べておく。特殊器台文様帯の沈線は透かし孔とよく整合することから、文様を描いて後に透かし孔を入れると記載されることがあるが、そうではなく、透かし孔形成ののちに施文という順番で製作される。

特殊器台の文様において帯が透かし孔に向かう場合、透かし孔の縁に帯の沈線が達することはほとんどないが、これは透かし孔の縁の寸前で線を止めているためである。また、帯が透かし孔の端をかすめるように通過することがあるが、その際に沈線の様子が変化する例がある。図2はいずれも宮山遺跡特殊器台であるが、1では一部の沈線が三角形透かし孔に当たって止まっており、2では巴形透かし孔の尾部を挟んで沈線の数が変わる。透かし孔が先にある状態で文様が刻まれたことは明白である。乾燥が進まないうちに透かし孔を切り抜き、器表が半乾きになった段階で施文するという手順は製作のうえでも合理的である。



1　沈線の停止



2　沈線の減少

図2　透かし孔と沈線

透かし孔がまず配置されるわけであるが、これは楯築神社弧帯文石でまず渦心円（宇垣二〇二一）が配置され、それにもとづいて文様を展開するのと同じである。透かし孔の配置は描くべき文様を念頭においてなされるが、詳細に位置を決めているわけではない。また、配置された透かし孔を基準に文様が描かれるわけであるが、厳密に同じ文様が繰り返されるわけではなく、文様は部分によって変化し帯の関係が逆になることもあることが、個体の文様全体を知ることができる西山遺跡特殊器台1や宮山遺跡特殊器台から知ることができる。文様は厳密なものではなく、改変、改造が容易であることを念頭に置く必要がある。

関連資料　さて、鯉喰神社墳丘墓特殊器台と同じあたご山型文様をもつ特殊器台は岡山市八幡神社遺跡（岡山市教委二〇〇九）（図3－4）、赤磐市あたご山遺跡（1）（狐塚一九七七）、総社市伊与部山遺跡（近藤一九九六）（2）、津山市上原遺跡（3）の資料が知られており（春成二〇一七）、他に津山市権現山遺跡（河本二〇二〇）（5）、また、井原市金敷寺裏山墳丘墓資料（間壁・間壁一九六八）も小片ながらこれに属するとみられる。これ以外に文様は若干異なるが同じ矢印形の透かし孔をもつ資料として倉敷市西山遺跡特殊器

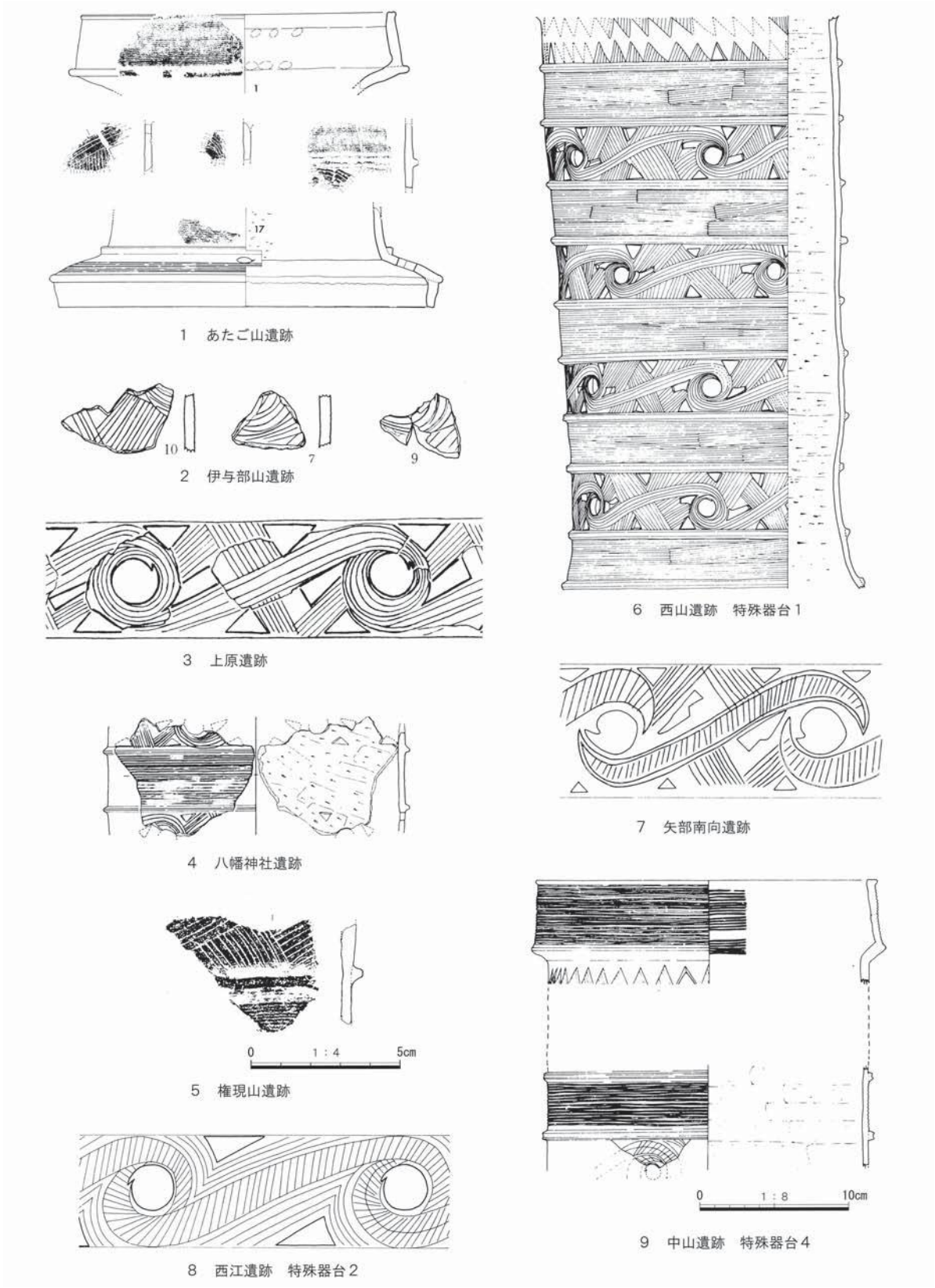

1
17
1　あたご山遺跡
10
7
9
2　伊与部山遺跡
3　上原遺跡
4　八幡神社遺跡
0
1：4
5cm
5　権現山遺跡
8　西江遺跡　特殊器台２
6　西山遺跡　特殊器台１
7　矢部南向遺跡
0
1：8
10cm
9　中山遺跡　特殊器台４

図３　関連資料　１：８、１：４

図４　透かし孔の形状
１：２

台１（真備町教委一九七九）（６）と倉敷市矢部南向遺跡竪穴住居三七上層出土特殊器台（岡山県古代吉備文化財センター一九九五）（７）がある。資料は岡山県下全域に分布する。

八幡神社遺跡以下のあたご山型文様で矢印形の透かし孔がどのようになるのかは、多くの資料で該当箇所が欠落するため不明と言わざるをえないが、伊与部山遺跡資料では報告書図版で見るかぎり切り込みがあるようで、この文様には基本的にこの形状の透かし孔が配される可能性が強い(1)。

一方、西山遺跡資料と矢部南向遺跡資料の文様はそれらと異なる特徴をもつが、透かし孔の配置は同じである。西山遺跡資料は渦状部をつなぐＳ字状の帯と交差する帯の幅が広く、配される帯の数も多い。矢印形の透かし孔の切り込みは角度が六〇～八〇度と大きくなることに加えて、透かし孔が帯と整合せず帯の端を切る形になる。これと、切り込みが鋭角で小さく、帯の間に透かし孔を配置する鯉喰神社墳丘墓資料を同じ型式(2)として扱うことはできず、上記の鯉喰神社墳丘墓資料の年代観とあわせ、西山遺跡資料は鯉喰神社墳丘墓資料よりも新しく、それを改変することによって生み出された文様と考えるのが適切である。また、矢部南向遺跡資料ではＳ字状の帯が平行沈線ではなく斜線の充填に変わるが、これに交差する帯はあたご山型文様の配置を維持する。透かし孔は矢印形を維持するとはいえ本来の形状からかけ離れたものとなっており、年代的に下ると判断できる。

透かし孔の形状、それと帯との関係からすると、鯉喰神社→西山→矢部南向の順になる。連続型の特殊器台文様では渦状部分で二つの帯が接する状態は多様であるが、この順で帯の巻き込みが弱いものに変化していくことがわかる。鯉喰神社墳丘墓例では左からきた帯は渦状部を一周以上回る。西山遺跡例は左の帯が巴形透かし孔を全周する点で鯉喰神社墳丘墓例と同じであるが、全周する沈線の数が少なくなり、右の帯が外側を平行して周回する(3)。そして、矢部南向例では左右二つの帯は渦状部分で絡み合わずＳ字形の連接となる。高橋護氏による渦状部分の分類（高橋一九八四）にもとづけば、わらび手形、Ｙ字形、Ｓ字形の順に変遷することになる。ただし、わらび手形には巻き込みが浅い広島県矢谷墳丘墓例も認められ、文様がこの順に変遷するのではない。楯築神社弧帯文石に見られるような何重にも巻き込む帯の表現から簡単な帯の旋回へ移行したと考えれば、この三種の出現が上記の順であったとしてよいだろう。先に示したあたご型の諸例を上記の帯の巻き込みであえて判断すれば、あたご山例と上原例は西山例に近い段階で、八幡山例は西山例と矢部南向例の間に入るかと思われるが、資料の残存状況からすれ

ば、あまり無理な追求はしない方が良いようである。

以上の資料群の最後となる矢部南向例に見られる斜線充填の帯は、向木見型文様（図3－8）の要素を取り入れたものである。向木見型文様をもつ資料のうち、たとえば中山遺跡特殊器台4（9）は文様全体の構成は不明ながら帯の巻き込みはかなり深いようであり、あたご山型文様をもつ資料および西山例のうちのいずれかと年代が平行するとみてよい。複数系統の文様が併存[4]し、影響を与え合いながら変化していったと考える。

おわりに

鯉喰神社墳丘墓資料は向木見型の特殊器台のなかで最も古く位置づけることができ、向木見型特殊器台を検討するうえで一つの基準となる。鯉喰神社墳丘墓は墳丘全長四〇mと楯築墳丘墓の築造以後で最大の墳丘規模をもち、きわめて特殊な祭祀具である弧帯文石を伴い、通常の弥生墳丘墓とは異なる存在である。王墓、楯築墳丘墓の築造に際して特殊器台が大形化したのと同じように、新たな王墓の築造に際して特殊器台の刷新がなされたと考えることもできる。それがこの資料のもう一つの意義である。

ここでは文様を中心に論じたが、特殊器台の編年を改めて考えてみることも必要であり、いずれ折をみて示すこととしたい。

《註》

（1）ただし、上原遺跡例では切り込みが設けられないとされており（春成二〇一七）、切り込みを失ったグループがあったことになる。

（2）帯を構成する沈線の数が多い権現山遺跡資料は西山遺跡と同型式の可能性がある。

（3）文様全体の特徴としてこのように述べることができるが、わらび手形に近い箇所も一部に見られる。

（4）ただし、透かし孔の数が多いあたご山型文様の成立が先行すると考えている。

《引用文献》

・宇垣匡雅「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第二七巻第四号、五五－七二頁　一九八一年
・宇垣匡雅「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究』（上）山陽新聞社、二七九－二九七頁　一九九二年
・宇垣匡雅『楯築墳丘墓』岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室　二〇二一年
・岡山県古代吉備文化財センター『足守川河川改修工事に伴う発掘調査　足守川矢部南向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告九四　一九九五年
・岡山市教育委員会『津寺（加茂小・体育館）遺跡』二〇〇九年
・狐塚省蔵「岡山県吉井町あたご山遺跡出土の器台、壺」『考古学雑誌』第六三巻第三号、六五－七二頁　一九七七年
・近藤義郎『伊与部山墳墓群』総社市文化振興財団　一九九六年
・河本　清「権現山遺跡A地区」『新修津山市史資料編考古』津山市　二〇二〇年
・高橋　護「組帯文の展開と特殊器台」『岡山県立博物館研究報告』第五号、一－二七頁　一九八四年
・春成秀爾「宮山系特殊器台の研究」『岡山県立博物館研究報告』第三七号、七五－九六（一－二六）頁　二〇一七年
・春成秀爾「向木見系特殊器台の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第二一二集、一八三－二三四頁、二〇一八年
・平野泰司・岸本道昭「鯉喰神社弥生墳丘墓の弧帯石と特殊器台・壺」『古代吉備』第二二集、六九－八四頁　二〇〇〇年
・間壁忠彦・間壁葭子「岡山県井原市金敷寺裏山古墳」『倉敷考古館研究集報』第五号　一九六八年
・真備町教育委員会『西山遺跡』　一九七九年